

創作少年少女小説

あすはいつくるか

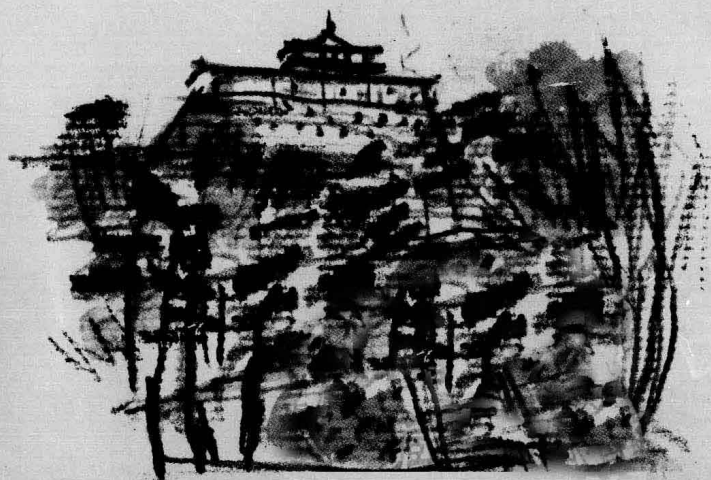
柚木象吉



創作少年少女小説

あすはいつくるか

柚木象吉



実業之日本社

NDC 913

創作少年少女小説

あすはいつくるか

ゆず き しょうきち
柚木象吉

実業之日本社

1971年

232ページ

21.5cm

本文9ポ活字使用

小学校上級～中学生むき

著者の了解により検印省略

あすはいつくるか

1971年9月25日 初版発行

著者 柚木象吉

発行者 増田義彦

印刷所 株式会社 東京研文社

発行所 株式会社 実業之日本社

[104] 東京都中央区銀座 1-3-9

TEL(562)4311(大代) 振替東京326



● もくじ

第一章 追われる少年 5

川原のできごと 6

三風寺町 13

なかま 20

あらそい 26

マムシの彦 34

にげる、タカ 42

第二章 湖のほとり 47

秋 48

右左口峠 56

おいはぎ 61

山小屋 69

四尾連湖 76

第三章 甲府の町 83

大手役所 84

黒イヌ 88

少年 95

あに・いもうと 103

わかれた日……………109

第四章 追う少年……………117

林の中……………118

副支配……………125

しぐれの道……………132

不安な日……………138

江戸のできごと……………144

決心……………151

屋敷の中へ……………159

第五章 あすはいつくるか……………169

正月……………170

少年の父……………174

お籠り堂……………183

ききおぼえのあることば……………189

信州へ……………195

よろこびの日……………201

先生……………209

赤報隊のさいご……………217

風にむかって……………225

■この本の絵をかいた人■

井 口 文 秀
い ぐち ぶん しゅう

一九〇九年富山に生まれる。

太平洋画会研究所修学。

日本画の格調高い童画美術で知られる。代表作『ムササビのコロコロするにようぼう』等。

第一章
追われる少年



川原のできごと

慶応元年（一八六五年）夏のある朝、まだ、陽がのぼったばかりのところである。

甲府こうふの南をながれる荒川あらかわの川原に、岸のがけ上の松林から、子どもの影が二つかけおりてきた。

十歳前後と、十二、三歳のふたりの少年で、ツギハギだらけのアカじみた着物に、のびほうだいにのびた髪かみをむぞうさにワラでむすんでいた。まっ黒に陽にやけた顔に、すばしっこそうな目が光り、朝つゆでぬれた着物は、べっとりとはだにはりついていたが、たいして気にしているようすもなかった。

さむらいの子ではむろんなかったが、百姓ひやくしやうや商人の子とも、どこか感じがちがっていた。

「見る、四郎。」

がけをかけおりてきたいきおいのまま、川原を川つぶちのほうまでかけながら、年かさのほうがさげんだ。

「まただれかロウヤをあげてしまったぞ。」

「ほんとだ。ちくしょう。」

小さいほうも大声をあげると、川岸の石ころの上にほうりだされた、黒っぽい、ぬれた四角いかごのようなもののところへ走りよった。

「まだあげたばかりだ。にいちゃん、まだ遠くへいってないぞ。」

かごのまえにかがみこんだ弟が、大声でふりかえったとき、兄のほうは、川原のまん中につっ立って、上流に人影ひとかげをさがしていた。

(ちくしょう、もうどこにもいない。)

兄は、くやしそうに口の中でいうと、足もとの石をひろって力まかせにそのへんになげつけた。

弟のまえには、土地の子が「ロウヤ」(牢屋)とよんでいる、四角形の、竹をほそくわって格子にあんだ魚とりのワナがころがつている。兄がいく日もかかつてつくったワナである。水からあげてまだ時間がたっていない証に、ワナからたれるしずくが、砂地にいくつも小さなあなをあけていた。

「ちくしょう、いつかとおなじやつらかな? にいちゃん。」

「わかるもんか。だれだっておなじだ。おれたちのロウヤなら平気であげるんだ。三風寺町のものは手くせがわるいなんていうくせに、自分たちこそドロボウじゃないか。」

兄の声には、弟にはわからぬいきどおりがこもっていた。

「四郎、おまえ、上のセキへいつてさかなを見ておいで。おれはふちのロウヤをあげてくる。」

兄はいいながら着物をぬいだ。

やせていたが、筋肉のよくのびた、しなやかなきれいなからだだ。兄はぬいだ着物を、ふわっと、じょうずに草の上になげると、そのままジャブジャブと波におどる陽のかけらをスネでくばしながら、流れの中にはいつていった。

荒川は、山国の甲斐国(山梨県)の川らしく水の澄んだ美しい流れだが、浅瀬をこえて、一步本流にはいると、その名にそむかぬあららしい水流が川底をえぐって流れている。むこう岸には、よこっ腹をふかくえぐられたけががつづいている。むかし本流がぶちあたってつくった跡だが、いまでは流れがかわって、がけ下は青みをおびたしずかなふちになっていた。

タカとよばれる兄のほうか、いちばんいいロウヤをしかけておくのは、そのふちである。あらう本流をつきつて、ふちまでいくには勇氣がいった。勇氣もあり、水泳も達者^{たしや}な子はそうはいない。だから、ふちはほとんどだれにもあらされず、無数のさかながすんでいた。

タカはこわさを知らぬように、その本流にはいつていった。たちまち激流^{げきりゅう}がやせたしなやかなからだをひきこんだ。黒い頭がつよい波をかぶって、みるみる下流におし流されていく。二、三度、ほそいうでが波をたたいたが、それもあらっぽい波にたちまちへしおられたように、波の中にきえてしまった。

と、五、六秒たったと思うころ、本流をこえたむこうに、ポツカリと黒い頭がつきでて、二本のうでが、子どもとは思えぬたくましい抜き手で、ぐいぐい岸に近づいていった。

タカは岸の近くでいちど息をすいこんだ。それからふちにむかつてさかのぼると、また大きく息をため、いっきに水底にもぐりこみ、両うででロウヤをかかえてうかびあがった。手ごたえのありそうなおもみに見えた。がけにつきでた、ハンの木の根に手をかけてひと息いれると、片手で、グーッと水面にひきあげた。

ざあーっと、音をたてて格子^{こうし}から水が流れおちる。すると、ロウヤの三分の一ほどもある厚^あさでハヤや、ヤマベがかさなりあって、銀色のぴちぴちした光をあげてとびはねた。

(どうだ。ふちのロウヤは手がだせないだろう。)

タカはきれいな白い歯でわらった。それから、ロウヤを片手でかくと、片手で水をかきながらいきおいよく岸をかけた。

(かあさん、こんな白っパヤをしょうゆでにたのがすきだったな……。)

本流にむかいながら思った。



——タカのおかげで、すきな川魚^{かわうお}がたべられる。

……母親のそんなことばが、小さかったころのタカを、どんなに幸福感でふるわせたことか。五、六歳^{さい}ごろから、ひまさえあれば川原ですごした。つりも、もぐりも、泳ぎも、そうしておぼえた。

（でも、死んでしまつてはおしまいだ。）

すきなハヤも、もうたべられやしない。いまではハヤはみんな売って、家のくらしのだいじなたしになっている。浅瀬^{あさせ}のロウヤをあげた人間は、そのだいじなかせぎのなん分の一かを、ぬすんだことになる。

本流のはげしい流れがぶつかつてきた。

——にいちゃーんっ。にいちゃーん。

四郎^{しろう}のただならぬいさげびをきいたのは、そのときである。

タカは川下^{かわしも}におしながされながら、波間から弟のほうを見ようとあせった。浅瀬^{あさせ}におよぎつくのがふだんの倍もながく思えた。

「四郎っ、どうした。」

浅瀬^{あさせ}のつるつるすべる石にのめりながら、上流を見た。

四郎が、なん人も少年にかこまれている。

かなり遠かった。タカは、ロウヤを持ったまま川原を走った。

「さあ、いってみろ。いつ、おれたちがとった？ とったという証拠^{しょうこ}がどこにある？ 見せてみる。」
走りながら、タカは、そういう声をきいた。

（町のやつらだ！）

身なりでわかった。川原でなんか顔をあわせたことのあるやつもいる。年上らしい顔が二つ三つ見えた。

「いえ。いえないだろう。とりもしないものを、とったなんていいやがって！」

つりぎおを持った、からだの大きい少年が四郎をつきとばし、おどすように胸をおしつけてきた。

「おい、きたぞ。」

あみを持ったべつの少年が、つりぎおの少年の耳に口をよせた。つりぎおの少年は、タカのほうを見てずぶとくわらったが、それでもタカをはばかりように四郎からはなれた。

（ロウヤをあげたのはこいつらだ。）

タカはかけよると、四郎をかばうようにそばに立った。

少年たちのそばに「陸持^{おか}ち役」（岸でいれものを持つかかり）の小さな子がいた。手おけのなかに、なんびきものみごとなハヤや、ヤマベが見えた。タカの視線^{しせん}に気づくと、その子はしょうじきに、あわてて手おけをうしろにかくした。——こいつらだ。こいつらにこんなハヤやヤマベがとれるものか。

目をあげると、つりぎおの少年のいどむような目にぶつかった。ふふんと、その目はわらって、無遠慮^{むえんりょ}にタカを見た。

（ああ、ちくしょう、この目だ！）

いいようのないいかりとかなしみがわいた。

よその町のものたちが、タカの町の人間を見るときだけ見せる、とくべつの目つき——、相手はろこつにその目をむけているのだ。

タカの手にしたロウヤに、目をうばわれる少年もいた。少年はロウヤをのぞきこんで、すごい、みんな見ろ

よ、といった。

「これ、ふちでとったんだろう、な、そうだろ。」

少年らしい敬意のこもった声だった。

だが、タカとむきあったつりざおの少年は、ちょっとロウヤに目をやっただけで、いっそう残酷な目の色になった。

「おまえたち、そのくらいとるのなんか、なんでもないよな。……おまえ、三風寺町さんふうじまちのものだろう。さかなでも、けものでも、生きものをとるのが、おまえたち、うまいんだよな。」

タカの顔から血の気がひいていった。

「いまいちどいてみる！」

タカののを、そういうことばがつきあげた。かれの頭の中を、足もとの大きな石を両手でつかんで、少年の頭をくしゃくしゃにくたく光景が走りすぎた。

「おい、もうよせ。もういこう……。」

少年のひとりが、不安そうにタカを見ていった。ほかのものも、息をとめてあとずさった。それほど、タカの顔は、異様いさまな青い顔にかわっていた。

つりざおの少年は気の強いたちようであった。なかまにひっぱられていきながら、またいった。

「まあ、せいせいとれよ、おまえたち。……一ぴきや二ぴき、なくなったからといって、そんなにおこることもないだろう、な。」

つりざおの少年のずぶといわらい声と、ほかのものたちの、同情心のまじった好奇の目が、上流のほうに消え

ていっても、タカはしばらくそうしたまま立っていた。

いいかえすことも、なぐりつけることもできなかった！ はげしいかなしみでそう思った。

「ちくしょう！ おれたちのをとったくせに平気なんだ。あいつら。」

くやしそうな四郎しろうの声をききながら、タカはつぶやいた。

（三風寺町のもの、か……。）

ガランとした大きなあなが胸むねにあいて、その中をむなしい音をたてて、風がふきぬけるようだ。

（なぜ、三風寺町のものではないけないのだ。なぜ、あんなさげすみをうけても、がまんしなければならないのだ。……ああ、だがおれは、あの目で見られるとからだじゅうから力がぬけてしまい、なんにもできなくなってしまうのだ……。）

気持ちをとりのおすのに時間がかかった。タカはロウヤのさかなを流れにつけた。

さかなたちの半分以上は、白い腹を見せてうきあがった。

三風寺町 さんふうじまち

タカは、さかなでおもいビックをさげて、がけをのぼった。セミの声がふるようにおちてくる。

丘おかの松林へでると、朝の陽ひをうけてうすくれないにそまった甲府城こうふじょうの白かべが見えた。江戸えど（東京）から三十六里り（約一四四キロ）、むかしから「小江戸」とよばれた繁華はんかな甲府の町がその下にひろがっている。甲府城には天守閣てんしゅかくはなかった。高い石垣いしがきできずいた天守台の上に、天守閣のかわりに、白かべのうつくしい本丸ほんまるがそびえ、そ

の下のほうには、大きな物見やぐらが二つ、城下を見おろして立っていた。

「にいちゃん、あれ、なんだろう。」

松林をぬけ、雑木林や原っぱのつづく道を、家のほうへむかったとき、四郎がまえのほうをゆびさした。

そこはふたりが帰っていく道が、街道と十文字に交差する地点だ。右へいけば西条橋をこえて中郡の村へつうじ、ひだりへまがれば甲府の市街へはいる街道である。その道を、役人にひきいられた男たちが橋へむかってか
けていく。

「なんだろう、にいちゃん。」

「いってみよう。」

タカはすぐ走りだした。

——なにか胸のつかえをふきとばすような、大きなことがおこってくればいい、走りながらそう思った。まい日、頭をおさえつけられているような、おもくるしい思いは、もうたくさんだ。それに、なにがおこってもふしぎはない世の中のような気がする。子どものタカにも、そう感じられる最近である。おとなたちの話では、京都のほうでなん人も人がきられたり、いくさがあつたり、外国の軍艦と大砲のうちあいがあつたりしたそうである。いや、もっと近くの上州（群馬県）では、百姓たちがさわぎをおこしたという。

なぜ、そんなことがおこるのか、タカには理解するだけの力はなかったが、不安といっしよに、ふしぎなころよい興奮がわいてくるのである。

「にいちゃん、見ろ。とうちゃんたちが！」

十字路へ先に走りついた四郎が、そういいかけたまま息をのんで立っている。